



診察室

ざっくばらん



イラスト・野畑桃花

原因除外して やっと気付く

老人性平衡障害

「年を取れば、体がふらつくのは当たり前」と医者も言う。でも、「自分のふらつきだけは違うのでは?」と思いたくもなろう。分かる。

82歳のY子さん。30年くらい前に、脳動脈瘤の手術をした患者さんだ。ずっと、「センチのおかげで」と感謝されてきた。が、このところ、ちよっと雲行きがあやしい。歩くとふらつくようになったのだ。ひよっとして、また頭の病気が?となる。立ち上がる時も、歩いている最中もふらつく。確かに、体のバランスが悪くなっている。しかし、それだけで、頭のMRI（磁気共鳴画像装置）の検査をしても変化がない。飲んでいる薬の中には、ふらつきの原因にな

るものはない。高血圧症も糖尿病もない。耳鼻科も神経内科も、異常はないという結果だ。となれば、残るは「老人性平衡障害」ということになる。

老人性平衡障害なんて、味もそっけもない病名だ。ただの老人のふらつきのことである。ふらつきの原因をあれこれと除外していったら、あとには加齢しか考えられないということとで付けられる。治しようがない。だから、医者もそっけだが、患者さんもこの病名は嫌いだ。Y子さんもしかり。そのうち、顔を見せなくなった。

2カ月くらいして、Yさんはまた、「センチのおかげです」と言っていて現れた。前と同じで、バランスが悪く、今度はなぜか、「ふらつく。なんとかしてくれ」とは訴えないのである。どうやら、アチコチの病院を回ってきたようだ。どこでも、年齢のせいだろうと言われたのか。足腰が弱らないように指導されたのだらう。

治らないと分かれば、症状をそのまま受け入れるしかない。受容には、それなりの時間が必要だ。一時でも信頼を得られなかった医者には、ツライものがある。が、それも受け入れるしかあるまい。

（石黒修三 しいしんクリニック
・脳神経外科専門医、金沢市在住、
射水市出身）